

魅力的なミャンマーという国

旧ビルマ

〜親切で温かいビルマ人の国民性〜

近藤節夫

2021年2月1日、突然ミャンマー(旧ビルマ)から衝撃的なニュースが飛び込んで来た。何と軍部クーデターによりアウンサンスーチー国家顧問、ウインミン大統領ら全閣僚がミャンマー国軍に身柄を拘束され、ミンアウンフライン国軍司令官統率の軍部が国家の全権を掌握し国を統治すると宣言したのだ。

1971年初めて当時のビルマを訪れてからちょうど今年で半世紀になる。その間仕事やプライベートでこの国を30回近く訪れ、温かいビルマ人の国民性に魅入られすっかりビルマという国の虜になり、ビルマの人びとと長い間交流を続けてビルマを思わない日は1日とてなかった。それだけにクーデター勃発の速報を耳にした時、うん、またもや軍の暴挙か? と愕然とした思いと同時に、親しく交流していたビルマの人たちの身の上を案じて不安な気持ちに捉われた。

長く旧ビルマに馴染んだ外国人の中には、軍事政権が改名した国名ミャンマーを好まず、今もビルマと呼んでいる人が多い。「ビルマの堅琴」を「ミャンマーの堅琴」と呼んでは、泉下の作者竹山道雄も目を白黒させることだろう。ビルマと日本は戦前から特別な関係に

あり、その国民性も国軍の暴力的な言動とはまったく相容れないビルマ人特有の温かな性格で、他の国々を見る目とは異なり、ビルマ人の国民性を考えた視点から見た方がビルマを知るうえで分かりやすい。ビルマは、現在でも日本人にとっては特異な存在感を示している。一度知り合うととことん付き合うようになるビルマ人の人柄は、思いやりのあるその人間性に尽きると言ってもよい。近年ビルマを訪れることはなくなったが、懐かしいビルマを想いつつ、一般にはあまり知られていないビルマの実情と、ビルマという国の特殊なビジネス環境の実態、及び戦争が絡んだビルマ人と日本人の絆と国民性について、気ままに綴ってみたい。

1. 国民民主連盟(NLD)の結成とクーデター前のビルマ

1948年宗主国イギリスから独立したビルマは、その後長きに亘り軍部によって政治が行われてきた。イギリスから帰国したアウンサンスーチー氏が1988年国民民主連盟(NLD)を結成したが、翌89年スーチー氏は軍によって身柄を拘束され自宅に軟禁された。90年総選挙でNLDが圧勝したにも拘わらず、不条理にも軍は政権委譲を拒否した。2010年には、民政移管に向けた総選挙で国軍系政党が勝利を収めたが、その裏にはNLDの総選挙ボイコットがあった。この時点で軍部は漸く11年間自宅軟禁状態だったスーチー氏の身柄を解放した。そして翌11年民政移管が完了した。15年に行われた総選挙では、90年に続き再びスーチー氏率いるNLDが



クーデター発生当日の朝日新聞夕刊一面記事
 総選挙で惨敗を喫した軍部は、このままでは将来的にスーチー氏主導の民主派には勝てないかと悟り、国軍有利な憲法を狡猾に運用

総選挙で惨敗を喫した軍部は、このままでは将来的にスーチー氏主導の民主派には勝てないかと悟り、国軍有利な憲法を狡猾に運用

して、スーチー政権の運営に制約を設けようと試みた。今日まで3度の総選挙によってNLDを中心に民主派が政権を握ったが、それでも国軍に有利な憲法と武力を背景にした国軍の圧力によって思い切った手を打てない消極的な政権運営を余儀なくさせられた。例え総選挙で一時的に民主派政党が国民の支持を得て政権の座に就いても、国軍によって制定された憲法、及び国軍の介入により政権運営をコントロールすることができなかったのである。

中でもとりわけ厳しい政権運営となったのは、2008年に国軍によって制定された憲法が民主派政府にとって大きな足かせとなったことである。理不尽にも憲法では国会議員の議席数が国軍に有利に配分されていた。国会における議員総議席数の4分の1が軍の指名する議員で構成され、議員が総選挙で選ばれるのは残りの4分の3である。これには民主派も悪戦苦闘した。しかも憲法改正には国会議員の4分の3以上の賛成が必要とある。これでは総選挙で選ばれる国会議員全員が憲法改正に賛成しなければ憲法改正は行われないうということになる。NLD政府は何とかして民主化のために自由で身動きの取れない現行憲法改正を実現しようとして試みた。しかし、全国会議員の内4分の1が国軍推薦議員であり、NLD政権政党は身動きが取れない立場に置かれたのである。民主主義体制下においてこれほど不条理な憲法が許されて良いものだろうか。憲法改正の可能性は、絶望的であり、さりとて現行憲法をこのままにしておくわけにもいかず、民主派議員や良識的な市民の間で、現行憲法に代わる新しい憲法の制定を具体化する動きが見られるようになった。

総選挙では決まって惨敗するほど国民の信頼が得られない国軍としては、現状では常に政権野党の立場に甘んじたままであるより手はない。そこへ新憲法制定の情報を掴んだ国軍は、ついにしびれを切らし現状打開の手取り早い政権奪取手段として、総選挙後の国会開催日初日にクーデターを企てた。

前記のように総選挙で国民の8割以上から支持され、しかも圧倒的な勝利を収めたビルマ人が慕うスーチー氏が党首であるNLDに対して、このままでは軍による独裁政権を考えていた軍部としては、永遠に目指す軍事政権としての展望が開けないと考え一計を案じて強行手段に訴えたのが、今回の軍事クーデター騒ぎの舞台裏である。国軍は明確な根拠や証拠もなしに昨年の総選挙で不正が行われたと一方的に主張し、無効を訴えているが、国民のほとんどは国軍の苦し紛れの作を見抜いており、説得力が伴わない。ついに現状打開の手取り早い政権奪取として軍事クーデターによる力づくの行動に突っ走ったというのが、偽りのないところである。

2. ビルマ人と日本人の関わり合い

太平洋戦争終戦直前の1945年3月27日、後にビルマ国軍記念日とされたその日、国家顧問のアウンサンスーチー氏の父、アウンサン将軍らビルマ独立の志士らは、宗主国イギリスを敵に回してともに戦ってきた日本の秘密機関「南機関」を主とする日本陸軍に対して突如刃を向けた。不意打ちを食らった日本軍は抗戦する暇もな



5チャット紙幣のアウンサン将軍像

く降伏した。その3年後の48年ビルマは漸くイギリスの植民地支配から脱し新国家として独立を勝ち取ったのである。惜しむらくは、その前年志士のリーダーだったアウンサン将軍は晴れて独立の日を迎えることなく、独立闘争の過程で政敵に銃撃され命を落とした。親日的だった将軍は生前何度となく日本を訪れ、日本人名「面田紋次」を名乗り日本政府から叙勲までされていた。娘のスーチー氏も一時京都大学に留学していたことがある。父娘揃って大の日本びいきだった。アウンサン将軍はビルマ人の間では今も最も尊敬されている人物であり、かつてはビルマの紙幣にはすべて将軍の肖像が描かれていた。また、ヤンゴン(旧ラングーン)市内の中心部に多くの市民で四六時中賑わっている大きなボジョー・マーケットと呼ばれる市場があるが、正式には、ボジョー・アウンサン・マーケット(アウンサン将軍市場)と言われてアウンサン将軍を偲んで名付けられた。それほどスーチー国家顧問の父親に対するビルマ国民の尊敬と敬愛の気持ちは根強いものがある。スーチー国家顧

間が広く敬愛されているのも父アウンサン将軍の存在と偉大な功績が与って力がある。

戦時中イギリスの植民地下にあったビルマが、イギリスからの独立を画策した時手を貸したのが、ビルマに進出した大日本帝国陸軍だった。そこには日本軍がビルマ軍を利用しながらイギリスからのビルマ独立運動のために秘密機関「南機関」を創設し協力した経緯があった。母国独立のために戦った独立の志士（ビルマ独立義勇軍）30人の中には、この南機関を通して日本へ送り込まれ、陸軍士官学校や陸軍航空士官学校で学んだビルマの若き軍人が数多くいた。その陸軍士官学校で教官を務めたひとりに、戦闘飛行中右足を失い、隻脚のパイロットとして勇名を馳せた加藤隼戦闘隊の檜与平がいた。そして檜の教え子に、後にビルマ政府の要職に就いたウーチッキン内相やソーライン少佐がいた。後記のようにハヤブサ部隊がビルマで大歓迎を受けた背景には、これらビルマ要人たちのハヤブサ、及び日本人への憧れにも似た尊敬と、かつてお世話になった感謝の気持ちから生まれた温かい配慮があった。戦時中の南機関に所属しながらビルマ人の家庭へ入り込み、秘密活動に携わってビルマ人女性と家庭を持った高橋八郎中尉や、陸軍中野学校、ビルマ、台湾、モロタイ島で軍人教育に当たった川島威伸少佐は、戦後ビルマ独立のために尽力してくれたという当時のビルマ政府の計らいで、日本人スタッフとして駐日ビルマ大使館に10年間も勤めていた。81年ビルマ政府は、ビルマ独立に貢献した2人を含む元南機関の7人の功績に対して最高の栄誉である「アウンサン・タゴン（旗の意）勲章」を授



在留邦人も出席したラングーン・タモエの元日本人墓地における加藤隼戦闘隊慰霊祭 1972年1月19日

与した。また、川島は戦後公職追放解除後に自衛隊に勤務し、陸将補を務めつつ、陸上自衛隊業務学校副校長として勤め上げ、87年日本政府より勲4等旭日小授賞を授与された。毎年1月4日のビルマ独立記念日に駐日ビルマ大使館で開かれる独立記念式典では、高橋、川島両氏がともに

日本人、ビルマ人を問わず接待役として務めていた光景が、何度となくお招きいただいた私にはごく最近のように思われてくる。とにかく日本陸軍とビルマの軍部、政府高官は、何かと強い絆で結ばれていた。

この他にも戦時中日本陸軍は、ビルマの士官候補生を数多く受け入れ、陸軍士官学校、陸軍航空士官学校、陸軍中野学校で厳しい教育



1983年北朝鮮のテロにより爆破されたアウンサン將軍廟

訓練を施した。そして
 巣立った青年将校ら
 が母国で独立のため
 に戦い、戦後のビルマ
 で政治的に活躍する
 ことになる。そのせい
 でビルマ政界には、日
 本にノスタルジアを
 抱く要人が数多く見
 られた。

そのひとつの象徴
 的な例が、1972年
 1月訪問した「第1回
 加藤隼戦闘隊ビルマ
 慰霊団」(略称：ハヤブ
 サ)のビルマ滞在中に
 表れた。「ハヤブサ」が
 ラングーン滞在中に、

その日の慰霊を終えてホテルに帰ってきたところ1台の政府専用バ
 スが「ハヤブサ」隊員たちを待っていた。理由も何も分からないまま
 呆気にとられ、あたふたとバスに乗り込んだところ、ビルマ政府関
 係者からこれからチツキン情報局長の招待で迎賓館ダゴンハウスに
 ご案内すると説明があった。藪から棒に言われて何もわからず一瞬

戸惑ったほどである。ダゴンハウスでは豪華なディナーパーティが
 用意されていた。ホスト役のチツキン局長、ソーライン少佐はとも
 に日本の軍歌を驚くほど良く知っていた。♪加藤隼戦闘隊♪や、♪
 愛国行進曲♪などを「ハヤブサ」慰霊団とビルマの軍人が一緒にな
 り、皆で肩を組み大きな声で声高らかに歌った。律儀なビルマ政府
 の要人が「ハヤブサ」慰霊団の訪問に際してせめてもの恩返しとば
 かり温かいおもてなしと配慮を示してくれたのである。戦時中日本
 の航空士官学校へ留学経験のあるビルマ航空マナージャーや、同じ
 く日本へ留学経験のある空軍大佐らが、「ハヤブサ」慰霊団に心の籠
 った歓迎ぶりを示してくれたのである。この夜の晩餐会は翌朝のビ
 ルマの主要各紙や、ラジオでも大きく伝えられ、何も知らなかった
 鈴木孝特命全権大使をはじめ日本大使館スタッフを驚かせることに
 なり、「ハヤブサ」は日本大使館へ表敬挨拶に訪れた。「ハヤブサ」慰
 霊団はその後行く先々でビルマの人びとから取り囲まれ歓迎された。
 その他にも「ハヤブサ」がダメモトと依頼した、かつての「ハヤブ
 サ」部隊の基地のひとつ、トウングー空軍基地を何とか訪問して基
 地の一角で慰霊祭を行いたいとやや無謀な希望を申し入れたことに
 対しても思いがけず受け入れてくれ、ビルマ航空機をトウングー・
 ビルマ空軍基地へ臨時に離着陸させてくれた。これには、慰霊団に
 参加していた終戦時の加藤隼戦闘隊長で、戦時中空港で度々離着
 陸を行った宮辺英夫もいたと感激した。元隊員たちにとっても中身
 が濃く想い出に残る戦跡慰霊団だったと後々まで語り草となった。
 このようにビルマ人と日本人の間には、他国への通常の旅行では

考えられないような表面的な外交や付き合いとは一味も二味も異なる、温かく思いやりのある交流が長い間続いていたのである。

3. 厳しく面倒だった旅行手配と依頼

初めて単身ビルマを訪れた1971年当時、日本は戦後四半世紀を経て漸く経済復興期を迎えていた。その間神武景気、岩戸景気、そしていざなぎ景気により戦後経済も世界が目を見張るばかりの復活を遂げていた。すでに東京オリンピックも成功裏に開催され、海外旅行も自由化されていた。戦時中軍神・加藤建夫少将が戦隊長を務めた「第5飛行師団飛行第六十四戦隊(加藤戦闘隊の正式部隊名)」は、太平洋戦争中「ハヤブサ」戦闘隊として一世を風靡し日本中を熱狂の虜にした。大河内伝次郎、藤田進主演の同名の映画「加藤隼戦闘隊」が戦後になってもビルマでも上映されるほど「ハヤブサ」の名はビルマでも広く知られ、その大衆的な人気は高かった。

そもそも「ハヤブサ」巡拝慰霊団を初めてビルマへ案内することになったのは、東京都内に住む西沢敏一さんと仰る、以前から親しかった「ハヤブサ」の戦友会「六四会」の幹事さんから、強く依頼されたからだ。ビルマで亡くなった戦友の御霊を弔うために「ハヤブサ」元戦闘隊員らを何とかビルマへ連れて行って欲しいと強く相談を持ち掛けられたのがそのきっかけとなった。

まだ海外旅行が自由化されて間もなく、パック旅行でさえそれほど華やかなマーケットではなかった時代だったとはいえ、ビルマに

関する旅行情報はほとんどなかった。ビルマの観光はまだ未開発でインフラ面でもソフト及びハードでもとて外国人観光客を受け入れられるような余裕もなかった。ガイドも正式なガイド教育を受けておらず急仕立てでどう話してよいか迷っている有様だった。だが、団員たちは目的地である戦跡地へ連れて行ってさえもらえればそれで充分と考えている人が多かった。ビルマへの旅行は、大手旅行社系旅行社がラングーン(現ヤンゴン)の商社支店の支援を得て戦没者慰霊団が僅かに実施されていた程度だった。大手旅行社でも障害と難題の多い未開拓のマーケットだった。当時は、ビルマへツアーを企画するにはその足掛かりすら掴めなかった。

こうなれば慰霊団ツアー実施のためには、ビルマへ乗り込み現地で関係機関と直接交渉するより他に打つ手はなかった。ベネズエラ、アフガニスタン大使を務めた友人の父・廣瀬節男氏にお会いして、ビルマ駐在大使へ宛てて紹介状を書いていただいた。当時のビルマ駐在・鈴木孝特命全権大使とはアポなしの訪問だったが、直接面会することができて、大使からビルマ航空など旅行関係の諸機関を紹介してもらった。幸い現地の関係者は「ハヤブサ」の勇名をよく知っていて、具体的なツアー企画の話はほとんどん拍子に進んだ。

それが翌1972年の「第1回加藤隼戦闘隊ビルマ戦跡巡拝慰霊団」の実現となり、現地ではビルマでも名高い「ハヤブサ」生き残り隊員の戦後初の訪緬団として想像もしていなかった歓迎を受けた。特に連絡したわけでもないのに、前記のように「ハヤブサ」を知る政府要人の温かい配慮により政府迎賓館で開かれた晩餐会に招待され

ることになった。以後毎年加藤隼戦闘隊の他にも他の航空部隊から戦跡巡拝慰霊団の企画を依頼されるようになった。そして毎年乾季の1月から3月にかけて戦没者戦跡慰霊団としてビルマを訪れることが、恒例となった。

だが、ビルマとの旅行手配の交渉は、当初中々一筋縄では行かなかった。現地で「ハヤブサ」の威光を活かして直談判することによって1度はビルマ側の懐に飛び込むことはできたが、ビルマ旅行ならではの特殊事情により手配上いくつもの難題を抱えて交渉は遅々として進まなかった。現地では旅行上のソフト面、ハード面のインフラがまったく整備されておらず、旅行会社も存在せず、ビルマ航空(Union of Burma Airways: 現在のミャンマー国際航空の前身)内の旅行セクションが唯一の交渉窓口だった。現地ではいつもガタガタ揺れる旧式バスを利用した。ガイドさんは口数が少なく、聞けば応えてくれるガイドぶりだった。もちろんバス車内にはエアコン設備なんてなかった。ほとんど窓は開けっぱなしで、車内は埃だらけだった。

2度目以降のツアーの依頼と交渉はすべて手紙のやり取りに依るものだった。郵便事情は最悪の状態で、返信に時間がかかり、電話で用件を依頼しようにも電話も直ぐにはつながらず、前以て日時を予約しなければならなかった。時には突然ビルマの電話局から今なら接続できるが都合はどうかと、準備もしておらず面食らうような唐突な交信申し出には慌てふためいたことも再三だった。今日のような便利なメールやFAXなんて当時はなかった。その後ビルマを訪



JAPANESE WAR VETERANS: General Suzuki, wartime Japanese Air Force Chief of Staff in Burma, and airmen who served in the Burma theatre during the Second World War recently arrived in Rangoon on a short visit to pay their respects to the Japanese war dead. Picture shows General Suzuki and the former Japanese Air Force men together with Director of Defence Services Intelligence Col Chit Khin (Air) and Commander of the Mingaladon BAF Maintenance Base Lt-Col Soe Hlaing (Air) in a group photograph taken after dinner given in honour of the visitors on January 18. NAB Photo

加藤隼戦闘隊慰霊団が迎賓館の夕食会に招待された

ことを報じた現地英字新聞 1972年1月22日付

れる度にどうしたらスムーズに交信できるかと話し合った挙句に、今ではほとんど使われていないテレックスが一番便利で効率的と分かり、以後はテレックスに頼った見積書及び手配依頼をすることになった。

その内に戦跡慰霊団の受注数

も増え、特にその中でも特殊なビルマ慰霊団については、マーケットは限られてるにせよ、それまで大手商社系旅行社が、自社が独占していたと考えていた市場を「ハヤブサ」によって奪われたと過剰な反応をして、ビルマ航空は大手商社と旅行社の強い突き上げにより同社以外の日本の旅行会社とは取引しないとの不条理で閉鎖的な特別契約を結ばされ、結果的にハヤブサ・グループのツアーはビルマ旅行マーケットから締め出されてしまった。

しかし、このまま手を拱いては折角企画した慰霊団ツアーのノウハウと独自に開拓した顧客を失う恐れがあると考え、この独占契約を無効にさせるべく私は急遽ビルマへ飛び、親しくなっていたビルマ航空支配人から理不尽な契約を結んだ理由、経緯と背景を聴取した。所属する航空会社の意向とは別に支配人は至極同情してくれ、ともにどうすべきか代案について相談に乗ってくれた。

何度も打ち合わせをし、お互いに知恵を絞った末に、ひとつの結論に至った。ビルマ航空と商社系旅行社との特別契約では、ビルマ航空としては日本以外の国からのツアーは引き受け、手配することは可能だと判った。そこではたと思いついた。「ハヤブサ」ツアーを日本以外の香港の旅行社からの依頼とすれば問題ないのではないかと香港を経由して旅行手配を頼むことの了解を支配人から得た。私はビルマからの帰途旅程を変更し香港へ立ち寄った。取引のある香港旅行社にこの間の事情を詳細に説明して、同社内に実態のない名義上の香港支店の設置を認めてくれるよう協力をお願いし了解を得た。私はその場で独断により自身を名義上の支店長に任命した。これにより香港の旅行社は日本とビルマの手紙の仲介取次をするだけで、私は日本からビルマ航空宛の手紙を香港の旅行社に送り、それを香港の旅行社がそのままビルマへ転送する形を取った。その返事はこの逆のルートで、送られてきた。この魔術的手配のやり方については、ビルマ航空は商社系旅行社から苦情を言われたようだったが、ビルマ航空と同旅行社との特別契約に抵触することはなく、幸い「ハヤブサ」慰霊団ツアーはその後も順当に企画し続けることができた。

陸軍航空隊関係の慰霊団企画、手配の依頼は年々増えて、多くの参加者に喜ばれ、感謝され、ビルマとのお付き合いが増えて交流は深まって行った。そして、私は毎年のように慰霊団にお供してビルマへ出かけたが、その他にも他の戦友会の希望も聞いて下見調査のためにビルマ各地を訪れることが多くなった。主に訪れる土地は旧日本軍が駐屯したり、戦った場所である。しかし、普通の都市ならともかく、訪問するのは地方や山間地帯が多かっただけに人跡未踏とは言わないまでも、交通の便に恵まれないところが多かった。そんな中で、慰霊祭を行っているとどこからともなく日本人らしい人物が周囲の人垣の隅の方からジッとみていることがあった。慰霊祭が終わるとまたいつの間にかすっといなくなっていた。恐らく日本軍部隊を脱走した旧日本兵が懐かしさのあまり遠くからそっと覗いていたのだろう。

こんなこともあった。航空隊関係者からぜひとも北部のミッチーナへ行きたいとの強い要望があったが、ビルマ側はこの要望だけは頑として許可してくれなかった。ある年に、珍しく中部都市のマンガレイから中国の昆明へ飛ぶ便が運航されるという情報を得た。翌年の航空隊合同慰霊団ではその便に乗りビルマから中国へ行くことになった。幸いビルマ航空からミッチーナ上空を低空で飛行するかから窓から戦没者を慰霊してはどうかと提案があった。この時は、結局機内から眼下のミッチーナ周辺で亡くなった英霊を慰霊する機上慰霊祭を行った。ミッチーナは異色な慰霊という形で戦友会から了解をいただいた。それでも思うように訪問が許されない都市がかな

りあった。中でも激戦地インパールやコヒマ方面は、山深い奥地にあり交通の便が伴わなかったので、現場を訪れることは難しかった。ビルマ国内における旧厚生省による日本人太平洋戦争戦没者遺骨収集事業が、シベリアと同様に大きく遅れたのもこのようなビルマ国内の固有の事情に負うところが大きい。

4. ビルマ人の温かく優しい性格

ビルマ人がどれほど優しい人たちであるかということについては、彼らと直に親しく接してみないと本当のところはよく分からないと思う。実際彼らと長い間交流を続けていると、他の国の人びととは良い意味で人間性が少し違うなあとと思うことが随分あった。その一端を紹介したい。

一度胸襟を開いた付き合いが始まれば、何を差し置いても相手の顔を見ないと収まらない国民性であることが分かる。ビルマを訪問するスケジュールを前以て手紙で知らせると、驚くことに搭乗便が到着する前から空港に家族揃って出迎えにやってくる。そして、当方の都合にはお構いなく、これから我が家へ行くこうとせがんで、もし今日だめならいつ来てくれるのかとしつこいほど熱心に家族ともども一緒に楽しく過ごすことを期待するのだ。帰国の際も必ず家族と一緒に空港へ見送りにやって来てくれ名残を惜しみつつ、次回はいつやってくるのかとくどいほど尋ねられる。時には面倒くさいと思う気持ちがないこともないが、外国人の友だからこのように歓

迎されれば、誰しも嬉しい気持ちに変わりはない。

今から40余年前にこんなこともあった。ニューヨークに渡った元ビルマ航空スチュワーデスの親しい女性がいた。彼女は日本航空で研修を受けるために来日したこともあった。いつも笑顔を決やさず優しく接してくれる親切なビルマ人女性だった。

偶々その頃アメリカで公認会計士資格を取得して、ニューヨーク(NY)の会計事務所勤めていた学生時代の親しい友人がいた。彼は学生結婚した妻を病で亡くして長らく失意のどん底にいた。ある年唐突に生活環境を変える決心をした。思い切って会社を辞め、



駅で赤いバナナを売る女性

ひとり息子を亡妻の実家に預けて、アメリカで公認会計士資格を取得するためNYへ行き、日夜勉強に励み、見事会計士試験にパスしたのだ。そしてNYで公認会計士として安定した生活を送っていた。だが、心の隅のどこかに悩みを抱えたまま、いつも寂しそうな暗い影が付きまとっていて、若かった学生時代当時の明るさを失っていた。NYを訪れて彼に会うたびにそのことが気になっ



トングー市内を走行する乗り合いバス

ていた。そんな時彼に知人の明るいビルマ人女性を紹介してあげたらひよっとすると友人の心の痛みも少しは癒されるのではないかと考えた。年齢的にも性格的にもお互いにぴったりと勝手に判断して、ある日NYの日本料理店で2人を引き合わせた。すると2人は気持ちがあつたのか、お互いに気に入ったようで、ほどなくして交際を始めて2人はお互いに結婚を考えるようになった。彼が美しいビルマ人女性の明るさと優しさにすっかりほだされたのだ。

交際も順調に進んでい
ると思っていたある日、
突然NYの彼女から辛く
悲しい電話を受けた。好
事魔多しというべきか、
彼女が泣きながら不慮の
交通事故に巻き込まれて
しまったと話したのだ。
まだ42歳の若さだった。
私には彼女を慰める言葉
が見つからなかった。
その後何年か経って漸
く気持ちの整理がついた
のか、彼女はNYに住む
ビルマ人の男性と結婚し、

現在1女を儲けてニューヨークで幸せに暮らしている。彼女と友人との交際を通してビルマ人の優しさを強く意識することになった。今でもビルマ人の女性というと、この親切で優しかったNYにいる友人の元カノを思い出す。

5. これからビルマの進むべき道

折角総選挙により民主的な政権が樹立されても、その都度軍部によつて政権を奪い取られては、総選挙を実施したこと自体が意味を成さない。2020年11月の総選挙ではアウンサンスーチー氏の国民民主連盟(NLD)が総投票者数の82%を獲得して圧勝した。この現実を知り前記のように国民から信頼を得られていないことを痛感した国軍は、将来の可能性を憂慮してこのうちは、力で政権を奪取し国民にものを言わせぬようにするより自らの権威と権力を発揮する手段はないと考えるに至った。ミャンマー軍の他国の軍隊と異なる特異性のひとつは、いくつかの主要系列企業を従えて民間とは独自の経済活動を行なっていることである。そのひとつに経済ミャンマー・エコノミック・ホールディングス(MEH)など国軍系企業が軍と提携している。このほかにも軍が経営する企業や工場、商店などが存在している。また退役軍人など関連団体を通じて国内でのビジネスへの投資も行なっている。そして懸念されるのは、これらの国軍系企業が日本企業ともビジネスを行って、日本から多額の資金が流れ込んでいることである。若い兵士たちは、国軍へ入隊するや徹底的に軍人魂と愛国心を叩き

込まれて洗脳される。彼らは、訓練キャンプに入った瞬間から、自分たちこそが国を守る砦であり、自分たちなしには国は崩壊してしまうと徹底的に愛国魂を教え込まれる。そして自分たちは国家の特権階級であり、一般市民よりもはるかに上位にいるという異様なプライドを身につける。兵舎でも兵士はその動きを常に上官に監視される。その結果思想教育によって市街地でもいたるところに敵がいるような錯覚に捉われるようになる。その独自の特異な考え方を積み重ねた拳句の果てに、兵士たちは、クーデター後の反国軍抗議デモに対しても、非武装の市民を無節操に殺害する命令に何のためらいもなく服従し、行動する恐ろしい人間性と残虐性を次第に身につけるようになった。同国人を殺害するクーデターに対して不信感と不満を持ち、中には良心の欠如が見られる兵士もいる。彼らは悩みながらも兵士としてそこに居続けるか、さもなければ気持ちの葛藤に堪えられなくなり武器を捨ててインドなど隣国へ脱出する。

それでも他国の激しい内戦などに比べれば、ビルマ人の根っからの優しい性格のせいか、残虐な殺害や死者の実数は少ない方だ。だが、国民への殺害がエスカレートするにつれ、一般市民は国軍というものは国や自分たちを守ってくれるものだとばかり考えていたが、少しずつその考えは薄れて来た。

国軍は国民から信頼されていないことを承知しながらも、敢えて自らが先頭に立ち将来的にも国家を統治して行こうとする強気の裏には、中国の強い支持と支援がある。国連安全保障理事会（安保理）では、この国軍によるクーデターには許容できる理由は何ひとつな

く、ミャンマーに対して制裁を課すべきであると考えた。だが、これに中国とロシアは一方的な圧力や制裁など強制的手段の要求は、事態を悪化させるだけだと現在の推移を見守るべきだと反対した。中国にせよロシアにせよ、人権抑圧問題などで国際社会の非難を浴びている国家らしい、都合のいい打算的な理屈である。

現状では今後事態がどう推移するか分らない。東南アジア諸国連合首脳会議（ASEAN）が4月末に開かれたが、同会議の限界を露呈することになった。これに出席したミンアウンフライン最高司令官に対し、ミャンマー国軍の暴挙について言葉では非難しながらも、拘束されたスーチー国家顧問らの解放を求める要求も声明もせず、敢えて国軍に強い処置は求めなかった。ミャンマーの背後で操ろうとしている中国が、きれいごとだけを口にして混乱した事態を解決しようとの気持ちがない限りは、しばらく現状は解決も好転もしないだろう。これは国際社会が新たに抱える大きな課題である。

6. 懐かしい昔のビルマ

素朴な景色や田舎のごく普通の日常生活が、ビルマの最もビルマらしい雰囲気を感じられる情景である。今でも思い出すいくつか懐かしいシーンがある。

中部都市マンダレイから首都ラングーンへ夜行列車で舞い戻った時の車内の混雑ぶりと、途中駅から乗り込んで来た焼き鳥売りの幼い子どもたちである。焼き鳥と言っても、日本の屋台の焼き鳥のよ



道路端の井戸で水浴びする女たち

戸端会議中のお母さんたちの姿も目に入ってきた。今にして思えばこの牧歌的な昔ながらの情景が、ビルマの最もビルマらしい光景として強く頭の片隅に残っている。

最近テレビで街頭風景を映し出している画像を見て、一抹の寂しさを覚えることもある。良い意味で伝統的な光

うな串刺しではなく、スズメをそのまま丸焼きにしたものだった。とても食欲がわいてこない。それでも買い求める人は結構いた。

また、雨期に列車で田舎へ行くとお百姓さんたちが、雨水が溢れた田圃の中で胸まで水に浸かって農作業をしている姿が車窓からよく見られた。バスで田舎を走行すれば、道端では水浴びしている井

景が少しずつ失われつつあることを感じる。最も気になったのは、大都市で抗議デモに参加している若者たちの服装が、腰巻に似た伝統的なロンジーからジーンズに代わりつつあることである。一昔前にはズボンやジーンズを履いている若者はほとんど皆無と言っても良かった。私もビルマへ行くとこの行動し易いロンジーをよく着用したものである。それが今では他の国の若者と変わらない服装になってしまった。

時代とともに、また経済発展の流れとともに風俗や習慣が変わるのは致し方ないことではある。それでも普段の生活では伝統衣装を羽織っていたビルマ人が、少しずつ欧米人と同じようにジーンズを身に着けるようになったことは、ビルマらしさを失うことでもある。

しかし、時代は変わった。外見上の変貌はやむを得ないとしても、現代ビルマ人がせめてビルマ人としての誇りや文化、風習は失わないうようなビルマを殊更愛する日本人のひとりとして強く願っている。

この軍部による軍事クーデターによって失ったビルマ人としての誇りと一体感を、今後ビルマが民主的な政権に戻ったにせよ取り戻すのは並大抵のことではないと思う。1日も早い昔の素朴なビルマが戻ってくれることを心より願っている。

